

1872 年、明治政府は、日本初の機械化された絹糸製糸工場の 1 つである富岡製糸場を建設した。これにより、彼らは高レベルの品質を維持しながら絹の大量生産を達成することを望んでいた。また、政府は西洋の技術を採用することで近代化を模索し、フランスから動力を与える蒸気機関と製糸器械を輸入した。機械化しても労働者は繭糸を蒸気動力の絹の巻き取り機に供給する必要があった。しかし、これらの機械は工場で生産される絹の質そして量を大幅に改善した。富岡のシルクは 1873 年のウィーン万国博覧会で世界に広く受け入れられ、"富岡シルク"の名前はヨーロッパに広がった。製糸場の成功は、富岡モデルに基づき 1873 年から 1879 年に日本全国に建てられた 26 戸の製糸場につながった。

富岡製糸工場が造られた当時、この工場は世界最大の製糸工場であった。また工場の建築は西洋と日本のデザインが合わさった興味深いものであった。西洋の要素としてレンガの壁やフランスから輸入されたガラスの窓、また中心柱を使わず工場の重い屋根を支えるための屋根組が取り入れられた。日本の要素は内壁を仕上げるための伝統的な石灰漆喰、日本の屋根瓦、田島弥平(1822-1898)の屋倉風の換気用屋根が取り入れられた。

1893 年、工場は民営化され、また片倉会社を買収するまで所有権が数回変更された。1960 年代に自動巻き取り機を工場に導入し、稼働が停止される 1987 年まで使用された。これらの機械は製糸プロセスをほぼすべて自動化し、今日でも最も高度な製糸機となっている。